

特定質問3：エマニュエル・ファルク氏『現象外』について

丸山 桜生

私がお尋ねしたいのは、あなたの著作『現象外』における、哲学をするということ、哲学的著作を書くということ、他者のために夜を明かし看取るということ、というこの三つの事柄の関係についてです。「現象外」というのは、あなたの著作のタイトルですが、同時に極限に達した現象を指して言う概念の名前でもあります。タイトルと概念、二つの「現象外」のあいだには緊密な関係があります。この関係についてのあなたの論及にしたがうなら、あなたは「現象外」の正確な翻訳を書こうとされているのだと思われます¹。そうであるならば、読者は『現象外』の読書を通じて、自分自身「現象外」を体験することになります。この本を書くことで、著者はすべてを与えつくし、この本を読むことで、読者もまた枯渇する²。誰も無傷では出て来られない。そのような本なのだと考えます。

この読み方がある程度正当であるとして、私が申し上げたいのは、この著者と読者との関係は、『現象外』における自我と他者との関係と重なるのではないか、ということです。あなたの本のなかでは、一方では、他者とは追い詰められた主体を「別の観点から」まなざし、「別の仕方が可能である」ということを主体に見せる者とされています (§65)³。他方では、主体と他者とはそれぞれの二つの孤独を分かちあうことはできないが、しかし分かちあえないという事実を分かちあうとされます⁴。このとき他者の孤独は私と私自身へと、つまり私固有の孤独へと送り返す「送り返しの構造」⁵としてはたります (§80)。追い詰められた者、あるいは、追い詰められている他者の傍らで何もできないでいる者にとって、あなたの著作は、「現象外」についての記述それ自体を通じて、生き延びる仕方あるいは看取る仕方を伝えるもののよう、私には思われます。私がお聞きしたいのは、あなたの著作のこのような側面についてです。少しだけ私の話をさせてください。あなたの言葉で言えば、私はたしかに「トラウマを負いうる」が、現に「トラウマを負っている」のでありません。仮に私が、トラウマを負って追い詰められているような誰かに話しかけるとして、その人がいかなるトラウマに苦しんでいて、いかなる孤独に塞ぎこんでいるか、私にはわかりません。あなたのおっしゃる通り、その人の孤独の核は私にとってつねに不可解でありつづけるのでしょう。しかし、『現象外』における主体と他者との関係は、ここでのトラウマを負った他者と私との関係とは同じではありません。前者は、追い詰められながらも互いに愛し合う二人の主体どうしの関係です。それにたいして後者の関係は、一方にいてのはそのような追い詰められた主体ですが、他方にいてのは、私です。与えられた健康に満足しており、他者には失われてしまった意味と現出に満ち溢れた世界に生きているのが私です。私はあなたの著作をできるかぎり誠実に読んだつもりです。それでも、この読書の裏側において私が送っ

ていたのは、たとえば起きて、食べて、寝てまた起きて……という単調な行為が織り上げている身体的生活です。『現象外』の読書を通じて「現象外」に陥るということは難しいのでしょうか。この本を読んでいるあいだ、ときどき自問しました。なぜ、いかにして、「現象外」はまだ私に訪れていないのか。しかし単調な生活が、このように問うことをやめさせます。アンリ・マルディネからのあなたの引用⁶に即していえば、私は危機の不可能性において生きている主体なのかもしれません。そして私の質問はこうです。あなたの著作のうちで、このような主体はいかなる位置をもつのでしょうか。

トラウマを負いうるがトラウマを負ってはいない主体である私には、ある限界のうちでしかトラウマに関して語ることができません。なぜなら、私がトラウマを負った他者に話しかけると、あるいは「現象外」について語るとき、私の言葉はその内容が何であろうと、私がこの無傷な生活を頼りにしているかぎり、私の言葉は軽く誠実さを欠いているように思われるからです。そしてこの不誠実さのうちにこそ、オプティミズムの根のひとつがあるように思われます。すなわち、あなたの批判するレジリエンスと和平主義の根です。

そこで教えていただきたいのですが、あなたの言う拡散された身体と、私の健康な、病的なほどに健康な身体との関わりはいかなるものになるのでしょうか。そしてこの健康な身体による健康な生活にとって、哲学はいかなる意味を持ちうるのでしょうか。最後に私の意見を述べさせてください。不誠実を避け、うまく黙るのにも言葉が要ります。『現象外』で言葉を尽くしてあなたが示してくださったこと、それは、私が話そうものなら言葉はまったく不誠実になってしまう以上、何も言わずに他の人を看取る仕方です。私にとってあなたの哲学の意味はここにあります。

¹ 「『現象外』とはここでは単に一冊の本であるだけではない。むしろそれは、各人みなを経験を正確に「翻訳」しているかぎりにおいてのみ、読者への警告として、本であるのだ〔……〕」 (Emmanuel Falque, *Hors phénomène: Essai aux confins de la phénoménalité*, Paris : Hermann, 2021, p.11)。

² 「読者よ、おそらくここで「与えつくして」しまった著者と同じくらい、君もまた枯渇することができるし、そうしなければならない」 (ibid., p. 454)。

³ 「(私を見る) 他者を見るのではなく、他者「から」見ること、そして私のように他者もまた自分固有の「孤独の核」に釘打ちされたままで見ること。そうすることによってこそ、私がそこに追い詰められている唯一の現実が、あらゆる実存性の唯一無二の地平ではないということが私に示されるのだ〔……〕」 (ibid., p. 377)。

⁴ 「私たちの分かちあわれた孤独によって、私たちは愛しあう。まさしく、しかし逆説的にも、私たちが孤独を分かちあわないがゆえに、さらには私たちが孤独を分かちあわないという事実を分かちあうがゆえに、愛しあうのだ。存在するという私たちの行為のそれぞれの、もっとも偉大な深みが存しているのもそこである。」 (ibid., p. 447)。

⁵ 「他者の孤独はいわば、私固有の孤独への「送り返しの構造」としてはたらく。私が他者の孤独を知っているからではなく、反対に私が他者の孤独を知らないからにほかならない」 (ibid., p. 447)。

⁶ 「病のしるしとは危機ではなく、むしろ反対に危機の不可能性である」 (ibid., p. 299) (Henri Maldiney, « Existence : crise, création », dans Maldiney, *Une singulière présence*, Paris : Encre Marine, 2014, p. 221)。